

言葉と向き合う

言葉に揺られ 移ろいながら

ミュージシャン 藤巻亮太

自身の外側で生まれる言葉

少しばかりあたりまえの話をします。私たちが赤ん坊として生まれた時、目の前の全ての物事に名前はありませんでした。意識が発達していくに従い「お母さん」「お父さん」「ごはん」「風」……全てが渾然一体となっていた世界に境目が生まれ我々は一つずつ対象を指す言葉を覚えてきました。人は社会的な生き物ですから言葉を介し

音楽を言葉で説明することのジレンマ

最後に自分の話をしたいと思います。私が23歳でデビューして最初に直面した大きな壁がプロモーションです。雑誌の取材、ラジオ、テレビ、Web、SNS……、あらゆるメディアで自身がつくった作品を宣传するのですが、いったい何を話したらよいのか全く分かりませんでした。なぜなら、プロモーションの時点では表現したいことは全て音楽の中に込めたと思っていたからです。つまりその作品について言えるのは「聴いてください」だけだったのです。一度音楽として完成された表現を、今度は言語化しろと言われた気がして私はパニックに陥りました。言語化できない想いがあるから音楽を始めたのに、なぜもう一度言葉にしなければならぬのだと悩みながら必死で言葉を探しました。

そしてようやく理解したのは世の中は自分の音楽を知らない人だらけであり、その人たちに少しでも興味を持ってもらうためのプロモーションであり、言葉を工夫して話す必要があるということです。そして大

て互いにコミュニケーションを取ることで生きていきます。この世界を理解し伝達し合うためのツールとして言葉や単語は、たいてい自分の外側で常につくられて与えられ、それを人々は記憶し使いまわしてきました。ただそれも、技術革新やそれに伴う価値観の変化によって、はやりすたりがあるようです。

自身の内側で生まれる言葉

今度は少し深い話をしたく思います。さて、言葉はもう一つの方法でも生まれてきたのかもしれませんが。それは沸き起こる感情や気持ちをどうにか相手に伝えるために、自分の内側から生まれてくる言葉です。しかし人間の感情を表す言葉は技術革新のようには毎年新しく生まれてきたでしょうか？今もたいてい使うのは「楽しい」「悲しい」……などとても分かりやすい言葉ばかりです。外側で生まれる言葉と内側を表現する言葉の違いはその種類や数にあるかもしれませんが。ただ、使い慣れたはずの内側を表現する言葉、たとえば誰かが「楽しい」と

切なのは必ずしも音楽自体を説明する必要はないということです。

メディアによって求められている言葉も違うので、1分で話す場合と2時間近くインタビューを受ける場合とでは当然ながら語る内容も違ってきます。プロモーションの意義は感じつつも巧みに対応するのは難しいもので、あの当時の私はあまりに生真面目に音楽が生まれたプロセスや想いを言語化しようと試み、それが出来ない自分に落胆して疲弊もしました。ただ、時間と経験を重ねるうちに気持ちを切り替えてゆきました。もちろんファンのためには曲が生まれた背景やストーリーを誠心誠意語りますが、実は音楽が出来上がってきたストーリーを上手に話すよりも、あまり関係ないのですが、たとえばそのレコーディングで起きたハプニングやその時期ずっと食べていたものやハマっていたものなどのサイドストーリーを話した方が興味を持ってもらえることに気づきました。

ここまで長くなりましたが、今になって自分の気持ちを上手に説明するのはやはり難しいものです。どんなに注意深く話し

言った時、それを聞いた他の皆が全く同じ「楽しい」に思い至り共有できるわけもなく、言葉を発した当人の「楽しい」でさえその時のありのままの感情を表しきれているとも限りません。

人の内側の想いは絶えず揺らぎ変わり続けます。内側で生まれる言葉が少ないのは刹那に移りゆく人の内面の複雑さゆえで、仮にそれを指す言葉を全てつくるとなれば海の波の一つ一つに名前をつけるような際限のない作業になってしまいます。その言葉が探り当てられないからこそ人は泣き、叫び、笑い、あらゆる身体的な表現で自分の内側から外側へその感情を表現するのでしょう。言葉の中にピタリと収まってくれる感情など減多になく、絶えず感情は言葉をはみ出していきます。そのはみ出してしまふ感情をどうにか表現するために音楽や芸術、文学は生まれてきたのではないのでしょうか。

人は生まれながらにして自分の気持ちを言い当てる言葉を常に探している生き物だと私は思うのです。

ていても、どこかで必ず違和感を覚えて落胆することもあります。しかし内側の想いと外側へ伝えたい言葉の間にズレが生まれることが、また新たな言葉を巡る旅の始まりでもあり、曲をつくり詩を描く私をどこかへ運んでくれるのです。そして私は心からそこへ行ってみたいと思っています。外側の言葉と内側の言葉に揺られながら、移ろいゆくままに景色を眺めながら。



ふじまきりょうた
藤巻亮太

1980年山梨県生まれ。2003年にレミオロメンの一員としてメジャーデビューし、「3月9日」「粉雪」など数々のヒット曲を世に送り出す。2012年、ソロ活動を開始。1stアルバム「オオカミ青年」に続き、2ndアルバム「日は好日」、3rdアルバム「北極星」、レミオロメン時代の曲をセルフカバーしたアルバム「RYOTA FUJIMAKI Acoustic Recordings 2000-2010」をリリース。2018年からは自身が主催する野外音楽フェス「Mt.FUJIMAKI」を地元・山梨で開催するなど精力的に活動が続けている。